

スポーツ sports

〈スポーツ sports〉ということばは、広義には、楽しみや健康を求めて自発的に行われる運動をいい、狭義には、競争として行われる運動を意味する。

〔語の由来〕 sport という語は、19 世紀から 20 世紀にかけて国際的に用いられるようになった英語であるが、その語源は、ラテン語の〈デポルターレ deportare〉である。この語は de=away, portare=carry が示すように、人間の生存に必要なまじめなことから一時的に離れる、すなわち気晴らしする、休養する、楽しむ、遊ぶなどを意味した。deportare は中世フランス語では〈デスポール desport〉となり、14 世紀にイギリス人が disport に転じ、16 世紀に sporte,あるいは sport と省略されて使われるようになった。

英語化された当初は〈必要な(まじめな)義務からの気分転換、骨休め、娯楽、休養、慰め〉を広く意味していたが、16 世紀には〈ゲーム、または気晴らしの特定の形式、とりわけ戸外で楽しめるもので、ある程度の身体活動を含んでいるもの〉を意味するようになった。さらに 17 世紀から 18 世紀にその意味が変化し、〈野外での身体活動をとまなう気晴らし〉とりわけ〈狩猟〉または〈勝負ごとにかかわる賭博や他人に見せびらかす行為、活動、見せ物〉をさすようになった。19 世紀の中ごろには、それまでの野外活動、とくに狩猟中心の意味を変化させ、〈競技的性格をもち、戸外で行われるゲームや運動に参加すること、そのようなゲームや娯楽の総称〉を意味するようになった。

〔スポーツの定義〕〈sport〉ということばの意味の変遷からみられるように、スポーツはそれぞれの時代や社会における、遊びや休養・娯楽生活のおくり方と深くかかわっており、その意味・内容は固定的でなく、時代や社会の慣習によって変化してきた。したがって、日常的な用語としての〈スポーツ〉は、このことばを使う人びとの生活習慣と関連して多義的であり、必ずしも身体活動に限定されないのはもちろん、ある人びとは競争の意味を重視し、ほかの人びとは気晴らしの意味を重視するというように、多様な使われ方をしていた。

イギリスのスポーツ史家、スポーツ社会学者であるマッキントッシュは、〈名詞としてのスポーツという語は、男、女、ゲーム、気晴らし、狩猟、闘争、冗談、あるいは植物の異変すらさしている〉と述べ、スポーツがあまりにも広く、深く人間の生活とかかわりあっているので、〈スポーツ活動を定義づけたり、限定を与えたりすることは困難である〉と指摘している。

しかし、20 世紀におけるスポーツにかかわる国際交流の発展は、この語の意味・内容に関する国際的な共通理解を確立する必要を生み出した。スポーツの地理的、社会的拡大にともなうその意味・内容の多義性の増大は、スポーツのとらえ方や考え方、またアマチュアリズムの問題などを複雑にし、国際的な水準での概念の統一を必要とするようになったのである。そのようなことから、国際スポーツ・体育評議会(ICSPE)は、1968 年に〈スポーツ宣言〉を提議し、スポーツとは〈プレイの性格をもち、自己または他人との競争、あるいは自然の障害との対決を含む運動〉であると定義した。すでにジレは 1949 年に著わした《スポーツの歴史》において、スポーツを〈遊戯、闘争およびはげしい肉体活動〉の 3 要素によ

ってとらえたが、国際スポーツ・体育評議会の定義が闘争を〈競争および自然との対決〉としたことを除けば、ほとんどジレの定義と変わらないといえよう。

プレイ、競争あるいは対決、身体活動の3要素によって特徴づけられるスポーツは、〈アゴンとしての運動〉ということができる。〈アゴン〉はプレイの一カテゴリーであり、困難に挑戦してそれに勝ち、自分がすぐれていることを認めさせようとする願望・欲求にもとづく活動であり、平等の条件のもとで、自分の力だけを頼りに、他人や他のチームと競争して勝とうとしたり、自然や人工的につくられた物的な障害に挑戦し、それを克服しようとする形式をとる。狭義の〈スポーツ〉は、およそこのようにとらえられるが、後述のように3要素の解釈やその含まれる程度などをめぐって、なお検討がつづいている。

1960年代にはいると、先進工業国では生活の全般的な機械化、都市化が急激に進み、自然環境の破壊や大気汚染などの公害の問題も出て、運動不足と結びついた健康の危機意識が増大した。また生活水準の上昇と自由時間の増加を背景にして、生活のなかで運動の楽しみを求める可能性も増大した。

こうした社会変化のなかで新しく運動の必要性和可能性が生じ、自発的・自主的に行う運動としてのスポーツ要求が人びとのあいだに広がった。そして、これに注目して人びとにスポーツを奨励する、スポーツの大衆化政策がとられるようになった。このような視点からのスポーツのとらえ方は、アゴンの性格にこだわらず、むしろ生活におけるスポーツの機能を重視するものであった。仕事や作業が機械化された社会では、運動はほとんど自由時間におけるレジャー活動となった。自発的・自主的に選ばれるレジャー活動の内容として、人びとがスポーツを選ぶのは、現代生活におけるスポーツの機能や役割を重視するからである。

しかし、生活におけるスポーツの機能のどの面を重視するかは、国や社会によって様ではない。イギリスにおけるスポーツの現状および将来の問題を検討し、1960年に報告書を刊行した〈ウォルフenden委員会〉は、〈社会の一般的な福祉に役立つと考えられる運動〉をすべてスポーツに含めている。いっぽう、1961年に制定された日本の〈スポーツ振興法〉は、スポーツを〈運動競技及び身体運動(キャンプ活動その他の野外活動を含む)であって、心身の健全な発達を図るためになされるものをいう〉としている。

このような状況のなかで、1975年、ヨーロッパ・カOUNシルは加盟各国スポーツ担当大臣の会議で〈すべての個人は、スポーツに参加する権利をもつ〉ことを基調にした〈ヨーロッパみんなのスポーツ憲章〉を宣言した。この〈憲章〉採択にあたってスポーツは、〈競争的なゲームおよびスポーツ〉〈野外活動〉〈美的運動〉〈調整運動〉の4つのカテゴリーでとらえられている。すなわちダンスや体操を含め、楽しみや健康を求めて行われる運動のすべてを、スポーツとしたのである。ここに、現代生活におけるスポーツの機能に注目した最広義のスポーツの定義がみられる。⇒みんなのスポーツ憲章

〔現代のスポーツ論〕スポーツを〈近代社会に特有の娯乐的・教育的運動形態(運動文化)〉とする考え方もあるが、現在ではスポーツの概念は柔軟にとらえられ、古代ギリシアのスポーツ、近代スポーツなどと使うように、また、自然民族のスポーツと使われるように、歴史

的にも地理的にも普遍性をもったことばとして用いられている。現代社会のこうした〈スポーツ〉の多様化を反映して、スポーツ論も多様となっている。

スポーツ論の相違は、対象となるスポーツの問題のとらえ方や、スポーツの伝統や現実の相違による。とくに現代のスポーツ論では、プレイやゲームとスポーツの関係についての考え方の相違が著しい。オランダのホイジンハやその継承者であるフランスのカイヨワのプレイ論が、プレイと文化の多面的で深い関連を明らかにして以来、プレイはスポーツの本質的な構成要素とみなされてきた。ホイジンハの《ホモ・ルーデンス》(1938年)。カイヨワの《遊びと人間》(1958年)などの著作に、プレイ、ゲーム、スポーツの関係についての論考をみることができる。⇒遊戯

しかし、プロスポーツの存在や高度化したスポーツがなかば職業的な性格をもつ現実から、プレイやゲームとスポーツの関係が再検討されるようになってきている。ロイは、スポーツを、①ゲーム・オカランス(できごと)としてのスポーツ。②制度化されたゲームとしてのスポーツ、③社会制度としてのスポーツ、④社会参与の様式としてのスポーツの4つの範疇に分けてとらえた。

〈ゲーム・オカランスとしてのスポーツ〉は、カイヨワのいう〈自由性、日常性からの分離、結果の未確定性、非生産性、規則性あるいは虚構性〉のプレイエレメントをもち、個人対個人、集団対集団、人間対動物、人間対自然あるいは物的障害、人間対観念的に定めた基準のいずれかの競争(あい対立する側の優越性を求めての闘い)であり、その結果が身体的技能、戦略、運によって決定され、身体的努力を必要とするものである。

〈制度化されたゲームとしてのスポーツ〉は、チーム、後援・支持団体、統轄組織などの組織的領域と、物的用具、スポーツ技術、知識体系などのテクノロジー領域、秘密性、見せびらかし、儀式などの象徴領域、技術や知識の伝達のための教育領域によって特徴づけられるものである。

〈社会制度としてのスポーツ〉は、スポーツにおける人間の行動を規制する、すべての組織的なものから構成されるスポーツ体制である。

〈社会参与の様式としてのスポーツ〉は、個人が社会的関係において関与するスポーツを、生産と消費あるいは直接・間接などの視点からとらえ、そこに構成されるスポーツの役割システムである。

このようにロイは、スポーツを直接的な実利に結びつかない自己目的的なプレイーゲームの脈絡でとらえ、実利的で手段的なワークーオキュペーションの脈絡に位置する運動は〈アスレティック〉であるとした。

いっぽう、エドワーズは、プレイ、レクリエーション、コンテスト、マッチ、ゲーム、スポーツの関連を検討し、その共通性と異質性を明らかにした。その説によれば、プレイ→レクリエーション→コンテストマッチ→ゲーム→スポーツの順に制度化が進み、①活動における個人の自発性と意志が減少し、②公的なルールや構造的な位置と役割、責任が活動の内部で優越するようになり、③日常生活のきびしさや圧力からの分離が弱まり、④活動の過程に

おける行動についての個人の義務と責任が強調され、⑤活動の結果とそれにかかわる個人の役割が、活動に直接参加していない集団や集合体にまで拡大され、⑥目標が多様で複雑になり、外部から派生する価値とより深く結びつくようになり、⑦活動のための準備や練習に多量の個人的時圏とエネルギーを消耗し、⑧活動への興味や活力をとりもどす限界を超えて、身体的・精神的奮闘の強調がますます優越する、としている。

こうした検討の結果エドワーズは、スポーツをプレイ、レクリエーション、コンテスト、マッチ、ゲームとは区別して、〈公式に記録されている歴史をもち、役割と位置の関係を統御する明白で公的なルールの枠内で、相手集団を打倒するという、明瞭あるいは不明瞭に価値づけられている達成すべき目標をもつ公的に組織されている連合体の一員もしくは代表によって、遂行される競争を通じ、身体的奮闘を強調する活動〉と、1973年に定義した。

また、ガットマンは、現代スポーツの特徴を明確にするために、プレイ、ゲーム、コンテスト、スポーツの関連を検討し、プレイを〈自発的なプレイ〉と〈組織化されたプレイ＝ゲーム〉に分け、ゲームを〈非競争的ゲーム〉と〈競争的ゲーム＝コンテスト〉に分け、さらにコンテストを〈知的なコンテスト〉と〈身体的なコンテスト＝スポーツ〉に分けた。これによって彼はスポーツを〈身体的なコンテストとして行われる競争的ゲームとして組織化されたプレイ〉として組織化されたプレイ〉ととらえ、そのうえで現代スポーツを、世俗化・平等化、専門化、合理化、官僚制化、量化によって特徴づけている(1978年)。

現代スポーツ論では、多様化したスポーツを、多様化に応じてとらえようとする傾向が強い。このようなスポーツのとらえ方は、スポーツに含まれているプレイの要素の程度に応じて、スポーツのカテゴリーを区別するとらえ方である。たとえばアイツェンとセイジは、スポーツを〈確立されたルールによって導かれる競争的な身体活動〉と定義し、ルール、競争、身体活動の3つの特徴によってとらえ、自己目的性や参加者の自発性と楽しみの程度などの違いから、〈インフォーマルスポーツ〉〈オーガナイズドスポーツ〉〈コーポレイトスポーツ〉の3つのカテゴリーに分けている。

〈インフォーマルスポーツ〉は、参加者の楽しみのために行われるスポーツで、ルールは参加者によって決められる。〈オーガナイズドスポーツ〉は、公的なルールにもとづくリーグやチームなどの公式な組織によるスポーツであるが、なお参加者の利益が第1に考えられているスポーツである。〈コーポレイトスポーツ〉は、経済及び政治によって強く影響され、変形されたスポーツで、見せ物、商売、あるいは政治権力の拡張としてのスポーツであるとしている。

〔スポーツの分類〕スポーツの分類は、その基準を何にとるかによって多様である。スポーツの性格がある程度統一的に認められていた時期には、スポーツの分類基準は主として外的、物的なものであった。個人スポーツ、対人スポーツ、集団スポーツという分類は人的構成を、ボールゲーム、器械運動などの分類は使われる用具を、屋外スポーツ、屋内スポーツ、あるいは野外スポーツ、陸上スポーツ、水上スポーツなど行われる場所をそれぞれ基準として分類したものである。

しかし、スポーツの拡大と発展にともなってスポーツの性格が多様になり、それぞれの特性をとらえた分類が必要になった。まず、参加者の社会的身分に基準をおいて、アマチュアのスポーツとプロフェッショナルのスポーツが分けられ、つぎに技能レベルに注目して、チャンピオンシップスポーツ、クラブスポーツ、マススポーツなどの分類が行われた。技能のレベルに応じてスポーツの目的や意味が異なるからである。高度化スポーツと大衆スポーツという分類もこのたぐいのものである。

マッキントッシュは、スポーツがプレイヤーにどのような満足をもたらすかというスポーツの機能に注目して、スポーツを、①直接他人と闘って、相手を支配・統制することに満足がある〈格闘スポーツ〉、②間接的に他人と闘い、目標を早く達成することで相手よりもすぐれていることを示すことに満足がある〈競技スポーツ〉、③自然や物的な障害に挑戦し、それを克服することに満足がある〈克服スポーツ〉に分類した。

競争がもたらす満足の性質に注目するならば、競争の対象による満足によってもスポーツを分類することができる。ロイの競争の分類にしたがえば、①他者に挑戦し、勝つことが楽しい〈競技スポーツ〉、②動物に挑戦し、支配したり捕獲することが楽しい〈狩猟スポーツ〉、③自然や物的な障害に挑戦し、それを克服することが楽しい〈克服スポーツ〉、④記録やフォームなどの観念的に定めた基準に挑戦し、それを達成することが楽しい〈達成スポーツ〉に分類される。

このような個人の満足に注目した分類に対して、デュマズディエは社会生活におけるスポーツの機能に注目して、スポーツを、①仕事としてのスポーツ、②教育としてのスポーツ、③レジャーとしてのスポーツに分け、レジャーとしてのスポーツを、さらにレジャーの機能にしたがって、a) 自己達成や業績を求めるスポーツ、b) 楽しみや気晴らしのゲームとしてのスポーツ、c) 健康のためのスポーツの3つに分類している。国際スポーツ・体育評議会の〈スポーツ宣言〉における分類、①学校におけるスポーツ、②自由時間のスポーツ、③チャンピオンシップのスポーツも、同じ観点からのものである。

現代スポーツにおいては、アマチュア概念の衰退にともなって、プロフェッショナル、アマチュアの区別の意味がうすれてきている。そのためこれに代わって〈生産としてのスポーツと消費としてのスポーツ〉とか、〈プレイとしてのスポーツとディスプレイ（スペクタクル）としてのスポーツ〉などといった分類も行われるようになってきている。

〔近代スポーツの成立と背景〕イギリスでは18世紀まで、主として貴族を担い手とし、狩猟をおもな内容としていた上流階級のスポーツと、田園や原野での気晴らしを中心とする民衆スポーツは、19世紀にはいると、産業革命による社会変化を反映して、新しく台頭してきた中産階級に担われる新しい意味・内容と形式をもつスポーツにとって代わられるようになった。それは、田園よりも都市の生活に適した人工施設のスポーツで、気の合った仲間が組織するクラブを単位とし、社交や楽しみのために行われた。

このようなスポーツは、さらにパブリックスクールやオールドユニバーシティで洗練され、組織化された。こうして成立した〈近代スポーツ〉は、それが成立した近代社会と、そ

の担い手である中産階級の諸特質を反映して、賭けや賞金を禁止する〈禁欲的・道徳的性格〉、忠誠心、協力、強い意志力、競争の野心、攻撃的性格、勇猛心、リーダーシップなどの徳目を養成する〈教育的性格〉、体力や運・偶然よりも技能と戦術・戦略を重要視する〈知的・技術的性格〉、個人よりも集団によるプレイを重視し、チーム内の役割が分化し、社会的にもクラブやリーグ、アソシエーションなどの組織に担われる〈組織的性格〉を特徴とするものであった。こうした近代スポーツは、パブリックスクールやオールドユニバーシティの卒業生によって、イギリス各地に伝えられ、急速に普及し、19世紀の末には全国的な組織化が進んだ。⇒パブリックスクールのスポーツ

〔近代スポーツの国際化〕19世紀はイギリスがその勢力をあまねく海外に広げた時代であった。近代スポーツもイギリスの海外進出にともなって、ヨーロッパやアメリカ、アジア各地へと広がっていった。イギリス人は外交官であれ、宣教師であれ、教師、商人であれ、だれでも彼らの住みついたところで仲間をつくり、彼らの新しい生活文化であるスポーツを楽しんだ。18世紀後期にはゴルフやクリケットはアメリカやインドに輸出され、19世紀の末までには、フットボール、テニス、ボート、陸上競技、水泳などの大部分の近代スポーツが世界の各地に輸出された。これらのスポーツのなかには、ポロ、ホッケー、バドミントンのようにイギリスの植民地にあった土着のスポーツを取り入れ、それを近代スポーツに洗練して逆輸出したものもあった。

純イギリス的スポーツといわれるクリケットが。主としてイギリスの旧植民地でしか行われていないように、近代スポーツの各国での定着は、それぞれの国や地域の条件に適応しながら進んだ。ドイツではドイツ体操（ツルネン）との抗争が20世紀の中期までつづいたし、アメリカでは伝統と歴史をもたない多民族国家の条件のなかで、アメリカンフットボールにみられるように、アメリカ式への変容が行われたりした。しかし、ルールや技術の変容はともかく、近代スポーツとしての基本的な性格に大きな変容はみられない。その意味で〈近代スポーツ〉は、いずれの国や地域にも普及し、近代社会において国際化する性格を本質的にもっていたということができよう。

イギリスの海外進出とならんで、スポーツの国際化に大きな影響を与えたのは近代オリンピック大会の開催であった。クーベルタンの提唱を受けたヨーロッパのスポーツ大が組織して、1896年に第1回の大会をギリシアのアテネで開催して以来、戦争の危機をはらむ複雑な国際関係と政治状況のなかで、近代オリンピックは重要な民間外交の場となり、これを契機に世界の国々にがスポーツによる国際交流に力を注ぐようになった。

初期のオリンピック大会は、個人のエントリーであったことに示されるように、純粋なスポーツ人の競技会であった。しかし、回を重ねるごとにしだいに大きくなり、世界の注目を浴びる国際的な祝典行事となるにつれ、これを利用しようとするものにとって、政治的にも、経済的にもひじょうに大きな機能をもつようになった。近代スポーツの国際化は、オリンピックの拡大と並行して進んだ。しかし、オリンピックでの勝利が国家の威光やコマーシャルイズムと結びつき、そのため政治や経済がスポーツを積極的に援助するようになると、スポー

ツは新しい性格を帯びるようになる。近代スポーツから現代スポーツへの転換がはじまるのである。⇒近代社会のスポーツ

〔現代スポーツの動向〕産業化の進展にともなう社会変化を背景にして、1960年代にはいるとスポーツの新しい社会的必要性和可能性が生じた。それは、健康で充実した人生のために、すべての人にとってスポーツが重要になったことであり。また、スポーツにおける勝利が社会的に重要な意味と機能をもつようになったことである。そのためスポーツは、社会階層を超えて急速に大衆化し、また、さまざまな社会的援助および干渉を受けて急激に高度化した。こうした現代スポーツにみられるきわだった特徴は、政治や経済との密接な関係による、スポーツの手段的性格の増大である。

1964年、東京で開催された第18回オリンピック大会が、人工衛星により中継されて世界各地にテレビ放映されて以来、一流選手のスポーツは政治や商業の格好の広告と宣伝の場となり、国際的競技会はスポーツの競争の場であるばかりではなく、政治的権力の競争と経済的利害の競争の場にもなった。現代のオリンピック大会や、サッカーのワールドカップは、20億を超える人びとに注視される世界最大のイベントである。

平等で理想的な条件のもとで行われる。本質的には無価値のものを求めての競争は、異論の余地のない絶対的な優劣を表示する。つまりスポーツは、本来、純粋な優劣そのものの競争である。だから、スポーツにおける優劣は、ほかのさまざまな価値の優劣に結びつき、価値の差別化の基準として機能することにもなる。国家や社会的諸団体はその威光を増大するために、企業は商品と企業のイメージを増大するために、スポーツを利用する。それぞれは自己と結びついたスポーツの勝利を確実にするために、スポーツに多大の援助をし、その見返りを期待し要求するようになる。スポーツは経済的報酬と社会的権威の手段となり、スポーツ体制は勝利を目標に組織され、専門化し、合理化し、官僚制化する。結果としての勝利が重要視されるにつれて、競争が激しくなるばかりでなく、敵対の感情がむき出しになったり、ドーピングなどの不正も生じる。そこに、隆盛にもかかわらずスポーツの危機が叫ばれる理由がある。

しかし、現代スポーツの隆盛は作為的なものではない。産業化社会のゆきづまりも指摘されるようになった現代社会では、衰弱する社会秩序を再生するために、人びとの不安にこたえ、カタルシスを与えながら競争のイデオロギーをたえず教育し、活性化しなければならない。スペクタクルとしてのスポーツは、楽しさと喜びにみちた劇的状況と、人間味あふれた儀礼への自発的で共感的な参加を通じて、イデオロギーの教化とカタルシスとの二重の機能を果たしているのである。

いっぽう、大衆スポーツにも政治や経済との密接な関係がみられる。生活福祉の充実が重要な政策課題となっている現代社会では、スポーツの奨励と振興は政治的に重要な意味をもつ。また、スポーツの普及と発展にともなう、人びとのスポーツ消費は、経済の動向に大きな影響を与えるようにさえなっている。スポーツは現代社会において、大きな位置を占め、巨大な勢力を誇るようになり、政治も経済も、文化や教育も、スポーツを無視することはで

聴きなくなっている。しかしそれは、現代スポーツがスポーツマンやスポーツ界のコントロールの範囲をはるかに超えた問題となったことでもある。そのこゝとに現代スポーツの危機も内包されているといえるであろう。

これからのスポーツは、〈プレイとしてのスポーツ〉と、〈ディスプレイ（スペクタクル）としてのスポーツ〉の2方向に分かれて発展するとみられる。〈プレイとしてのスポーツ〉では、競争的、挑戦的な性格を弱め、健康を考え、自然や他人との運動による自由な交流を楽しむ〈エコロジカルスポーツ〉が重要になるであろう。

いっぽう、〈ディスプレイ（スペクタクル）としてのスポーツ〉は、発達する科学技術とより密接に結びつき、人工的に制御された環境のもとで、コンピュータの分析による戦略や戦術を駆使し早期に素質を発見され科学的に養成された選手が行うスポーツで、生物科学や遺伝子工学による人間改造まで予想される〈ハイテクノロジースポーツ〉へと変貌するであろう。⇒現代社会とスポーツ、スポーツコマーシャリズム

(佐伯聰夫)

【最新】スポーツ大辞典 初版発行 昭和 62 年 6 月 1 日 出版社 大修館書店 編集 代表岸野雄三 監修 日本体育協会
--